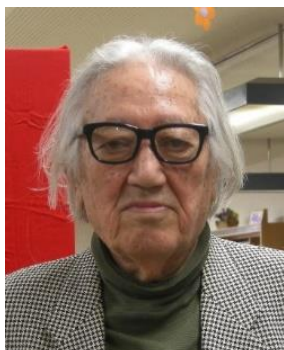


テレビドラマ「遠い約束」の原作者
故増田昭一先生を想う

満州の歴史を語り継ぐ高知の会代表 大野正夫

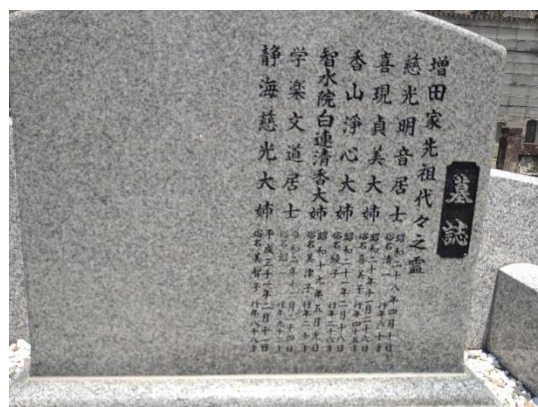


終戦で混乱していた満州の新京にあった難民避難所で、1945年秋から極寒の冬に、親から離れた子供たちと過ごして、その悲惨な生活を3冊の本、3冊の絵本にまとめて刊行した増田昭一先生は、2020年12月24日に急逝された。奇しくも、絵本「サンタクロースが来なかった」に書かれている“のんちゃん”が亡くなった日である。増田先生は、この幼かった女の子への想いは強く、“クリスマス”ということにはしなかったそうである。

増田先生は、足腰が不自由になり、高齢者施設に翌日入所の手続きをしていて、昼食を取って自室で昼寝をすると休んでいた。起きて来ないので、お嫁さんが入室すると、「息をしていな」と大騒ぎになった。老衰で享年92歳であった。

筆者は、先生の生涯を描いた「大地の伝言」を刊行したが、まだ先生が語っていないところがあり、聞き取りを続けていた。コロナウイルス感染事情から電話での聞き取りであった。月に2回程度であったが、7月まで連絡があった。先生からの電話が途切れていて、夢工房の片桐務さんに、増田先生の様子を見に行ってもらいたいとお願いした。「元気です」とのメールで安堵していた。息子さんの話では、夏バテから食べる量が、だんだんと少なくなっていた。

ワクチンも接種して、先生のお墓参りに、6月11日夢工房の片桐務さん、小学校同級生の山下洋一郎君、塩海洋介君の4人で、御自宅の近くにある高長寺に行った。



増田先生の家系は小田原藩の藩士であり、墓地はお城の裏にあった。増田先生は、奥様が亡くなれた時に墓地を整理して、新しいタイプの墓石にしていた。自分のところは、空けてあって、逝去後に、墓誌には、彼が遺言して彫られたと思える戒名「学楽文道居士」となっていた。仏教語字がない。増田先生独特の戒名である。4人で“楽”の文字の解釈をいろいろ考えた。墓石の下で先生は微笑んでいたであろう。右隣の「智水院白蓮清香大姉」は、増田先生と歳が近い姉で、女学校を出て、父の居る満州に渡り、1年もたたずに、動物が媒介する伝染病で急逝した。享年20歳と書かれていた。白蓮は満州に咲き誇る花で、清香は良い表現である。誰が戒名を付けたのだろう。

増田先生は、ドラマ「遠い約束」で、講演・講話を頼まれれば、山奥でも、小さい集会場にも出か

けたそうであるが、高知に行ったことがないので、「高知で講演をしたい」と言われて、2018年8月4日に「平和資料館」草の家で、「遠い約束」の上映と講話の会を企画した。当日になって、片桐さんの運転する車が、小田原からの自動車道の極端な遅延で、チェックイン時間に間に合わずに、来高がかなわなかった。講話は、筆者が代行して実施した。このイベントが契機となって、「満州を語り継ぐ高知の会」が発足した。

増田先生は、小学校の恩師であるが60年間お会いすることがなく。終戦記念特集テレビドラマ「遠い約束」を視聴して、先生の生涯を書くまでに、親しくお会いすることになった。



「大地の伝言」を刊行した記念として、箱根のホテルに一泊の旅行をした。この旅行は、足腰が少し不自由な増田先生のために、車椅子で移動できる特別室で、午後3時入った。箱根の美しい溪谷を眺め、自由に温泉に浸れて、食事が部屋に運ばれる至り尽くせりのサービスであった。増田先生もご満足で、あまり父親の話をされなかったが、この時に、「父は中学校の成績が良くて、本人は旧制高校、大学に行きたかった。しかし祖父が海軍軍人で、「そんな金はない。軍人になれ」と言われて、陸軍士官学校に入った。「当時の軍人は、まだ給料が安かったのだろう」と言った。

「父は士官学校を出て、苦戦の中支、北支と日中戦争の前線の部隊勤務が長かった。「点取り虫だけが参謀になり、前線から離れて卓上図戦で、指揮を取っては、戦争は負けるね。父は、俺に一度も軍人になれ！とは言わなかった。父はシベリアからの帰国した時に、“こより”のような巻紙に、戦死した部下士官の名前が書いたものを持っていた」。このように父を語ることは、今までになかった。



増田先生との聞き取りは、多くは先生のお宅で行うことが多かったが、本が仕上げに入る頃から、片桐さんと、一緒に、広い喫茶店で、筋書きの空白を埋めてゆく作業をした。増田先生の話し方は、そのまま文章になる無駄がない独特の話術であった。この話し方は記憶があった。

小学校の時に、国語や算数の授業は生徒をにらみ、大声で話した。

そして、難民収容所の子供たちの話になると、トーンが変わった。2019年、最後の同窓会になった「増田先生と鈴木先生を囲む会」で、多くの同級生が、「覚えています。先生が満州で子供たちと過ごしたこと。幾度も聞きました」と語った。先生に満州の話聞いた私自身、算数や国語の授業

の記憶はほとんどないが、「子供たちは飢えと寒さで死んで逝ったんだ！」という語りは、はっきりと記憶がある。私たちの教室は、陽の射さない西側の薄暗い部屋であったので、舞台は出来ていた。

増田先生の生涯を取材して、満洲の数奇な経験を核に『大地の伝言 満洲戦争孤児との約束 増田昭一の生涯』（夢工房、2020年）を刊行した。表紙の絵は、増田先生が描かれた満洲の大地である。増田先生が、その後に語ったことを書き留める。

難民収容所にいた子供達のほとんどは、満洲開拓団家族の子供達で親が亡くなり、また迷子になった者たちであった。開拓団の集団生活に慣れていたこともあり、子供同士は仲良くしていた。どういうわけか暗い表情の子供はいなかった。増田先生は17歳の少年であり、“お兄さん”と慕ってくれて、自然と子供達の輪の中に入っていった。9月には収容所には多くの子供達がいたが、子供達は満人（中国人）に引き取られていった。中国人は「日本人の子供はかわいい。頭が良い」と言って、比較的生活の良い家庭と思われる人に引き取られていった。満洲残留孤児として報道され、帰国された多くの方々は、新京市内にたどり着く前に農民の家庭に引き取られた子供達であり、悲惨な生活をしたと思う。農民は貧しかった。そのことを知ってもらいたく、ドラマ「遠い約束」で、新京の収容所の子供が中国人女性に引き取られていったことを、筋書きに入れてもらった。

収容所の子供達は 屋台や店のものを盗むということにはしなかった。そういうことを知らなかった。物売りも、ほとんどしなかった。売るものがなかった。

11月になると発疹チフスが蔓延し、子供たちは日に日に亡くなって逝った。しかし、お互いに介護しあい、「日本に帰る。帰国の希望がなくなると、その後は天国に行く」と、彼らの目は輝いていた。酷寒の2月には、ほとんど子供達はいなくなっていた。増田先生が収容所を出て、守衛になった頃には、子供達はいなかったという。亡くなったか、中国人に引き取られていった。夢工房の片桐務さんから、「増田先生は、子供達が書いたメモ書きのようなものを持ち帰っていた。それが、本のなかに書かれている」と言われた。私がこのことを尋ねたら、「本も書き、処分した」と言われた。

満洲の特攻作戦について、“魔刀石の戦い”の記録以外は、詳しい資料がない。石頭甲種幹部学校の学徒1500名が牡丹江から魔刀石方面に出陣し、魔刀石の戦場には750名が10kgほどの爆雷を抱えてソ連軍戦車に飛び込む特攻作戦を決行した。負傷者や山中にとどまったものは150名ほどで、2日の戦闘で約600名が戦死か行方不明である。

魔刀石は、国境から牡丹江市占領を目指したソ連軍戦車隊の最前線の戦場であった。この方面の第5軍の戦略は、牡丹江の市民の避難と戦闘体制を整えるため、3日間、牡丹江への侵攻を遅らす特攻作戦を取った。この作戦については、増田先生は詳しく語った。

特攻作戦は、増田部隊長も息を飲む、驚きの“にわか作り”の作戦であり、第5軍傘下の多くの駐屯部隊から、1個中隊、100名ほどの特攻隊が、魔刀石以外に、いくつかの戦場に向かった。牡丹江まで多くの部隊が駐屯しており、その実体は今もってわからない。増田先生の父は、魔刀石の近くの愛河に置かれた兵器廠部隊の部隊長であった。たまたま夏季休暇で、家族に会いに行ったところ、ソ連軍の侵攻に会い、父の命令で特攻隊に加えられた。父はシベリア抑留後帰国したが、父は多くは語らず「息子も戦場で死なせたい！と思った」と言われた。100%死ぬ異常な判断ではあった。増田部隊から100名が特攻作戦に加わったが、戦史には全く書かれていない。

生き残った学徒兵が記述した戦記は、勇ましく、また血気に燃えた戦いとなっているが、増田部隊の特攻隊員は、開拓団などから招集された30代から40代の老兵だったという。そのことを増田先生は詳しく語った。皆、死を恐れ、家族や故郷を思いつつ、消沈して明日の決行を待った。一

夜を皆どう過ごしたか、死を覚悟した翌朝は、老兵の顔が変わっていたという。目が異常にきらきらとしていた。最前線は学徒兵たちの陣で、増田部隊はその後方の丘の中腹に陣を敷いた。老兵たちも同じく、「死ぬ」という現実を超越した心境で、前方の学徒兵が戦車の飛び込むのを見て、皆「自分達も飛びこみたくなった」という。「戦場の中に入ると人間は変わるんだな!」と思ったと言われた。戦争は絶対にあってはならない。息子を特攻隊に送った後の父の行動は全くわからない。「最後の戦いのことを語らない父の本音が、今でもわからない」と増田先生は言う。

増田先生が語った「魔刀石の戦い」から 3 日間の牡丹江降伏までの特攻戦は、侵攻するソ連戦車隊にとって、“動く地雷”と恐れられた。多くの戦場の戦況は伏せられたままになっている。天上の増田先生が納得するものを書き残したい。